『比較日本文化学研究』第15号（2022）

論　文

太宰治「惜別」論

―― 魯迅「藤野先生」との関連を視座として ――

史　　蕊

広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期

Study of “Sekibetsu” by Osamu Dazai: From the perspective of its relationship to “Mr. Fujino” by Lu Xun

Shi Rui

Abstract: “Sekibetsu” is a novel written by Osamu Dazai, a representative figure of Japanese Buraiha writers, and it is based on “Mr. Fujino” by Lu Xun. It is one of the main adaptation novels in Chinese literature. This paper was prepared in response to a project by the Cabinet Intelligence and Research Office and the Japanese literary newspaper that aimed to materialize the five fundamental principles outlined in the Declaration on Greater East Asia and corresponded to the principle of independence and affinity. First, it probes the reason behind Dazai’s creation based on Shina by investigating the historical context of “Sekibetsu,” along with the Greater East Asia Co-prosperity sphere and the Greater East Asia assembly. By referring to the reception of Lu Xun and his literary works in Japan at that time and the connection between his work and Dazai’s, this paper attempts to explain why Dazai used Lu Xun’s “Mr. Fujino” as the subject. Secondly, this paper filters out the content change made by Osamu Dazai through a comparative study of the content and literary expression of “Sekibetsu” and “Mr. Fujino.” Additionally, it analyzes Dazai’s motives for adopting the novel and the historical background. In conclusion, Dazai conveyed a type of “pure independent affinity” through his novel, which differs from the untruthful slogan in the five principles of the Joint Declaration of Greater East Asia.

Keywords: Osamu Dazai, “Sekibetsu,” Lu Xun, “Mr. Fujino,”
Greater East Asia Co-prosperity Sphere

はじめに

「惜別」は太宰が内閣情報局と日本文学報国会の「大東亜共同宣言五原則」の作品化という企画の下で創作し、「独立親和」の原則に対応する作品である[1]。内容については1902年から日本留学生活を始めた周樹人（即ち魯迅）をモデルとし、特に彼の1904年９月から６年３月にかけての仙台医学専門学校に在籍していた時期を中心に描いている[2]。魯迅の随筆「藤野先生」を軸として書かれたこの作品は、「清貧譚」や「竹青」と同様に太宰の中国文学の翻案作品である。

「作品としての「いい気なもん」ということと別に」、「惜別」は「太宰の戦後へ歩み出ようとする懸命な努力のみえる作品だ[3]」と、尾崎秀樹は「惜別」の太宰治文学における位置付けに関して指摘している。また、内閣情報局と日本文学報国会の委嘱の下で書かれた作品であるためか、「惜別」は太宰の作品群の中で特異な一作として扱われてきたと言えよう。さらに、「惜別」の同時代評を確認すると、本作が刊行された直後、荒正人は「あしぶみ ==== 太宰治最近の四著 ====」（『日本読書新聞』第348号、1946年６月５日）の中で、次のように「惜別」を評している。

> 最後に『惜別』。これは魯迅が仙台医学校に遊学してゐたころの一断章だ。文学へ転向していつた魯迅の飛躍を淡淡と叙してゐる。しかし、やはりあしぶみである。

荒のやや否定的な批評が現れた約一年後、当時、魯迅専門家と称されていた竹内好は太宰の「惜別」をさらに厳しく批判した。竹内の『魯迅』は1944年12月に日本評論社によって刊行され、寄贈者名簿には太宰の名が確認できる。２年後の夏、召集から復員した竹内は太宰の「惜別」を読み、「藤野先生」（『近代文学』第２巻第２号、1947年３月１日）で以下のように酷評している。

> 「惜別」の中の魯迅が、太宰式の饒舌であつたり、また「孔孟の教」といふ、魯迅の思想とはまるきり反対の、一部の日本人の頭の中だけにある低能級な常識的観念をふり撒いたり、また、嘲笑者であるべきはずの「忠孝」の礼讃者であることなどは、この作品と、その作者とが持つてゐる制肘を基として論じなければならぬだらうから、私は問はない。（中略）魯迅の受けた屈辱への共感が薄いために愛と憎しみが分化せず、そのため、作者の意図であるはずの高められた愛情が、この作品には実現されなかつたのでは

ないかと思はれる。

類似した言説は竹内の「花鳥風月」（『新日本文学』10月号、1956年10月）などの文章にも見られる。一方、「惜別」を評価しようとしたものが完全にないわけでもない。例えば、竹内実は「使命感と屈辱感――民族的責任の視点」（『現代の発見』第3巻、春秋社、1960年2月）で、戦時中という条件を考えると、「日本人の使命感に対立する感覚を取り出した点は、やはり太宰の文学者としての見事さというべき」だと述べている。しかし、こうした肯定的読解が存在するものの、当時、魯迅専門家と称されていた竹内好の「惜別」に関する一連の批判の影響があまりにも大きかったためか、「惜別」を太宰の失敗作とみなし、肯定的評価より否定的評価のほうが圧倒的に多かったと言えよう。

続いて、日中両国における「惜別」に関する先行論をそれぞれ整理し、研究の現況をまとめる。

・日本の研究誌に掲載された論考

内容上から考えると、今までの「惜別」研究は大まかに三部分に分けることができるだろう。一つ目は「惜別」の材源に関する考察である。例をあげると、大塚繁樹は「太宰治作「惜別」と中国古典」（『愛媛大学紀要第一部人文科学』10A（文学・語学篇）、1964年12月15日）で、太宰治の魯迅の他の作品への引用模倣や様々の中国的典拠を逐一調査したうえで、その結果を整理した。五十嵐康夫は「太宰治『惜別』成立論――さねとう・けいしゅう氏の著作を中心に――」（『日本近代文学会会報』51、1980年3月）において、太宰治は実藤恵秀の著作、特に『留日学生史談』をも参照したのではないかと指摘している。二つ目としては太宰が描き出した魯迅像を実際の魯迅と結びつけて研究する論である。例えば、松木道子「太宰治『惜別』における魯迅受容のあり方」（『国語国文　研究と教育』9、1981年1月31日）、千葉正昭「太宰治と魯迅――『惜別』を中心として」（『国文学 解釈と鑑賞』48-9、1983年6月）など、太宰の魯迅観を検討する論も多数見られる。三つ目としては、作家太宰が「惜別」を創作した意図についての研究である。矢島道弘「「惜別」私論（前）――執筆事情への疑問と太宰の意図」（『芸術至上主義文芸』23、1997年12月）、仁平道明「「惜別」の意図」（『太宰治研究21』、2013

年６月19日）などの論考が例として挙げられる。

・中国の研究誌に掲載された論考

中国側の「惜別」研究の中では、作家太宰の魯迅観に関する論考が大半を占めている。例えば､陳瀟瀟は「太宰治･「惜別」･周樹人」（『安徽文学』2007-2、2007年２月）で、太宰の中の魯迅と実際の魯迅とを比較し、太宰は「惜別」の中で､「周さん」の口を借りて自己の心情を告白していると述べた。また､「惜別」を通して、太宰の戦争観や家庭観などを解明しようとする論考も存在する。王琳「「惜別」とその周辺――太宰治の私的モチーフを中心に」（吉林大学学位論文、2014-5、2014年５月）、曾婷婷・周異夫の「隠れた国家主義者：太宰治の戦争「不在」と天皇崇拝」（『東北師大学報（哲学社会科学版）』2018-11、2018年11月）などがある。一方、中国人の魯迅研究者による「惜別」論も見られる。董炳月は「自画像の中の他者　太宰治「惜別」研究」（『魯迅研究月刊』2004-12、2004年12月15日）で、太宰は自分の心情を作中人物に仮託している読み方を肯定しつつも､「惜別」を完全に太宰自身の自画像として読むことについては一面的であるとして反対の意を示した。また、他の資料と結びつけながら「惜別」の新たな解釈の可能性を探ろうとする研究も無視できない。例えば、董は「井上ひさしの「反魯迅」――『シャンハイムーン』の喜劇芸術と意味構造」（『魯迅研究月刊』2014-8、2014年８月）では､『シャンハイムーン』と「惜別」との影響関係及び類似性を検討した。さらに､「惜別」の太宰作品群における位置付けや作品の評価に関する論考も少なくない。王向遠「「アジア主義」「大東亜主義」及びその御用文学」（『名作欣賞』2015-9、2015年９月）が例として挙げられる。

以上のように、日本においても、中国においても、先行論では、現実の魯迅が重要視される傾向にあり、太宰が描き出した魯迅像を現実の魯迅と結びつけることによって、太宰の魯迅観を論じようとする研究が多い。また、太宰が「惜別」を書いたときに参照した資料､作中における中国的典拠の由来、作者の創作意図、他作品との影響関係に関する論考もすでに多数の蓄積があると言える。

「大東亜共同宣言」の「独立親和」原則の作品化という企画で創作された小説であるため､「惜別」が国策小説として読まれてきた面は少なからずあるだ

ろう。しかし、近年になると、「政治協力」という捉え方ではなく、「政治反対」という視点から作品を捉え直す可能性が提示されるようになった。例えば、権錫永は「〈時代的言説〉と〈非時代的言説〉――「惜別」――」で、次のように指摘している。

> この点に限って言うならば、「惜別」は極めて抑制された言説になっていると言える。ここで言う抑制された言説とは、言説内容が極端なまでにつつみ隠され、例えば、〈時局賛美〉を装って批判が可能になるような言説のことであって、これは権力の統制のために選択を余儀なくされる抑制された文体によって為されるものである。すると、もう一方で、この言説は（一応抽象的な言い方をするならば）〈時局賛美〉的な言説を包み込むものだという言い方も可能であろう[4]。

このように、国策小説という従来の読み方とは異なる角度、いわば政治や時局への批判という視点から「惜別」を読み解く可能性を探ることにより、本作を再評価することが必要になってきていると思われる。一方、当時の太宰がなぜ「支那」を選び、さらに魯迅に着目したのかについての問題もまだ十分に検討されていないため、「惜別」研究は必ずしも行き届いているとは言い難いだろう。そこで、本稿では、太宰が「支那」及び魯迅作「藤野先生」を選択した理由を考察した上で、依嘱作家としての太宰の執筆意図を明らかにし、そのことを通じて、「惜別」を再評価することを狙いとする。さらに、太宰の「大東亜共栄圏」への関わり方も検討していく。

一、選ばれた支那と魯迅

1943年11月５、６日の両日にわたって、大東亜会議が帝国議事堂で開催された。日本国、中華民国、タイ国、満州国、フィリピン国、ビルマ国の六箇国代表東条英機、汪精衛、ワンワイタヤコーン、張景恵、ホセ・ペー・ラウレル、ウー・バー・モウが出席し、自由印度仮政府首班スパス・チャンドラ・ボースが陪席する。６日の午後、「大東亜共同宣言」が満場一致採択される。その内容は次の通りである。

> 抑々世界各国が各其の所を得相寄り相扶けて万邦共栄の楽を偕にするは世界平和確立の根本要義なり
>
> 然るに米英は自国の繁栄の為には他国家他民族を抑圧し、特に大東亜に

対しては飽くなき侵略搾取を行ひ大東亜隷属化の野望を逞うし遂には大東亜の安定を根柢より覆さんとせり、大東亜戦争の原因茲に存す

大東亜各国は相提携して大東亜戦争を完遂し大東亜を米英の桎梏より解放してその自存自衛を全うし左の要綱に基き大東亜を建設し以て世界平和の確立に寄与せんことを期す

一、大東亜各国は協同して大東亜の安定を確保し道義に基く共存共栄の秩序を建設す

一、大東亜各国は相互に自主独立を尊重し互助敦睦の実を挙げ大東亜の親和を確立す

一、大東亜各国は相互に其の伝統を尊重し各民族の創造性を伸暢し大東亜の文化を昂揚す

一、大東亜各国は互恵の下緊密に提携し其の経済発展を図り大東亜の繁栄を増進す

一、大東亜各国は万邦との交誼を篤うし人種的差別を撤廃し普く文化を交流し進んで資源を開放し以て世界の進運に貢献す[5]

この宣言が発表されてから一週間足らずのうちに、それに基づく大東亜建設要綱実現に対する文化的協力案が「文学報国」第9号（不二出版、1943年11月10日）に掲載され、そこには小説、劇文学、評論随筆、詩、短歌、俳句、漢詩漢文学など多数の部会の実施要綱が付されている。そのうち、〔小説部会〕の「実施要項」には、次のような記述が確認できる。

大東亜建設要綱の五項目を主題とせる規模雄大なる構想の小説を創作刊行し、大東亜各国民に皇国の伝統と理想とを宣布し共同宣言の大精神を滲透せしむる。

「惜別」は上述のような背景の下に誕生した作品である。しかし、そもそも太宰はなぜ複数の国の中でも特に「支那」を選び、さらに魯迅に注目し、彼の「藤野先生」という随筆を題材として小説を書いたのか。無論、各国の地理条件、総合実力、作家自身の知識の蓄積など様々な面に関係するが、「支那でなければならない」という決定的な理由がやはりまだ明らかにされていないため、先にこの問題を検討したい。

まず当時、日本と中国との交際の実況を把握することが必要であろう。1943年10月30日、大日本帝国特命全権大使谷正之と中華民国国民政府行政院院長汪兆銘が南京で「日本国中華民国間同盟条約」に署名する。その内容は

次のようである。

> 大日本帝国政府及び中華民国政府は両国相互に善隣としてその自主独立を尊重しつつ緊密に協力して道義に基く大東亜を建設し以て世界全般の平和に貢献せんことを期しこれが障害たる一切の禍根を芟除する確乎不動の決意を以て左の協定せり
> 第一条
> 日本国及中華民国は両国間に永久に善隣友好の関係を維持する為相互に其の主権及領土を尊重しつつ各般に亘り相互敦睦の手段を講ずべし
> 第二条
> 日本国及中華民国は大東亜の建設及安全確保の為相互に緊密に協力し有ゆる援助を為すべし
> 第三条
> 日本国及中華民国は互惠を基調とする両国間の緊密なる経済提携を行ふべし[6]

第四条から第六条、及び付属議定書の引用はここでは省略するが、主に条約の実施時期、または日本国軍隊の撤去に関する内容である。一週間後に開かれた大東亜会議の内幕はさておき、これらの記述から考えるならば、当時の日本側が求めていた理想的な日中関係はいくつかのキーワードでまとめることができる。それは「自主独立を尊重する」「緊密に協力する」「善隣友好の関係を維持する」「互助敦睦」であろう。

では、他の国との条約はどうであろうか。それぞれを確認し、キーワードを抽出してみると、次のようになる。

- 「日満議定書」――「独立国家として承認する」「善隣の関係を鞏固する」・「権力利益を確認尊重する」
- 「日タイ同盟条約」―― 「相互の独立及び主権を尊重する」「政治的経済的及び軍事的な支援を行う」
- 「日本国ビルマ国間同盟条約」――「独立国家として承認する」「自主独立を尊重する」「緊密に協力する」
- 「日比同盟条約締結」――「独立国家として承認する」「自主独立を尊重する」「緊密に協力する」「善隣友好の関係」

このように、「独立を尊重する」という点はどの国との同盟条約においても強調されているが、「近隣友好の関係」が特に強調されているのは日中、日

満、日比のもののみであろう。さらに、「大東亜戦争の完遂を寄与する」という点に注目したい。1943年1月9日に「戦争完遂についての協力に関する日華共同宣言」が南京で発表された。日本はあらゆる参加国と「同盟条約」を締結したが、明確に戦争完遂について宣言を出したのは中華民国との間においてのみであった。それゆえ、太宰にとって、「支那」は紛れもなく多数の国々の中、「独立親和」原則を小説化するにあたって最適な国であったと言えるだろう。

大東亜会議が開かれた同年の8月25日には、「大東亜文学者大会」が日本文学報国会によって、11月17日には「大東亜新聞大会」が日本新聞界の主催のもとで同じく東京の大東亜会館で開催された。『大東亜共同宣言』の一冊には、次のような記述が見られる。

> 大東亜文学者大会も大東亜新聞大会も共にこの大東亜共同宣言の精神とするところを徹底せしめることに責務があるのであり、両会議ともアジアの思想戦を統一するところに意義があるのである。また、両会議の特質は、その参加代表が、その背後に何千何万といふ読者もつてゐるといふ大きな影響力にある。なほ両会議の代表者は会議ばかりでなく、日本の軍事・政治・文化・生産等の戦ふ日本の各方面の姿を見学視察して帰国したのであるが、彼等が目で見、耳で聴いたところの日本の真姿を、その筆によつて母国に伝へたであらうことは、アジアの結束を固ふする上に於て、まことにその意義少しとしないのである[7]。

一方、太宰の「「惜別」の意図」には、以下のような内容が見られる。

> 明治三十五年、当時二十二歳の周樹人（後の世界的文豪、魯迅）が、日本国に於いて医学を修め、以て疾病者の瀰漫せる彼の祖国を明るく再建せむとの理想に燃え、清国留学生として、横浜に着いた、といふところから書きはじめるつもりであります。多感の彼の眼には、日本の土地がどのやうに写つたか。横浜、新橋間の車中に於いて、窓外の日本の風景を眺めながらの興奮、ならびに、それから二箇年間、東京の弘文学院に於ける純真にして内気な留学生生活。東京といふ都会を彼はどのやうに愛し、また理解したか。（中略）さらにまた重大な事は、この仙台の町に、唯一人の清国留学生として下宿住居をしてゐるうちに、彼は次第に真の日本の姿を理解しはじめて来たといふ一事であります。（中略）彼は周囲の日本人の生活を、異常の緊張を以て、観察しはじめます[8]。

太宰は「惜別」の中に周さんの日本観察を何度も強調している。また、上に引用した箇所と比較してみると、「目で見、耳で聴いた」/「多感の彼の眼には」、「日本の真姿」/「真の日本の姿」といった表現が類似していることがわかる。「「惜別」の意図」は太宰が1944年2月3日の協議会の決定を受け、10日頃までに執筆され、内閣情報局と日本文学報国会小説部会に提出された執筆計画書である[9]。それを参照すれば、太宰は「「惜別」の意図」の執筆直前に発行された『大東亜共同宣言』を読み、さらに同書に記載された同盟条約を参照し、日本と各国間との交際状況を踏まえながら「支那」を対象国に決定した可能性がかなり高いのではないかと考えられる。そこから、当時の太宰の積極的な執筆意欲もある程度うかがえよう。

続いて、太宰がなぜ魯迅を選び、さらに随筆「藤野先生」を下敷きに「惜別」を書くことにしたのかについて検討する。1902年、魯迅が南京の砿務鉄道学堂を卒業し、同年の3月から日本留学の途についた。彼は最初に学籍をおいた東京の弘文学院を卒業してから、1904年の9月に仙台医学専門学校に入学し、藤野厳九郎先生に出会う。1906年3月に仙台医専を退学してまた東京に戻る。1909年に帰国し、足かけ8年間の日本留学生活を送った。では、魯迅はいつ、どのように日本の知識人に紹介され、さらに受容されたのか。まずは日本における魯迅文学の受容状況やその系譜の中の「惜別」の位置付けを確認する。

1909年5月1日、魯迅と弟周作人が「周何がし」として明治中期の代表的言論人三宅雪嶺が主筆を勤める雑誌『日本及日本人』に紹介されており、それが世界で最初の魯迅紹介文である。20年代に入ると、中国文学者の青木正児が「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」という論文の中で魯迅に言及し、それは「魯迅という筆名が日本に紹介された最初の記録である」[10]。30年代に入ると、佐藤春夫など日本の知識人の尽力により、魯迅は総合雑誌『改造』『中央公論』に多く取り上げられるようになる。35年になると、『魯迅選集』（岩波文庫、1935年）が刊行され、さらにその2年後には、『大魯迅全集』（改造社、1937年）全7巻が中国に先立って日本で初めて刊行された。このように、「日本の読書界でも魯迅は忘るべからざる名となった」という[11]。

1945年8月、第二次世界大戦終戦。戦時下に創作された「惜別」一作は、当時の「日本文壇における魯迅受容の最初期の大きな果実」で「日本における魯迅受容の記念碑的作品」と評されている[12]。終戦以降、日本における魯迅

研究ブームには一時的に空白があるが[13]、竹内好、増田渉ら日本知識人の努力により再び生気を取り戻したと言えよう。それ以降の魯迅受容状況の詳述はここでは割愛したい。

1940年1月、魯迅は「空前の民族的英雄」「中華民族の新文化の方向」といった毛沢東の「新民主主義論」[14]の中の魯迅評価により、中国での魯迅イメージは神化・偶像化され始める。一方、日本においてもそのような傾向が見られる。例えば、魯迅が逝去した年に、書店経営者・文化人の内山完造が綴った「魯迅先生追憶」を見てみる。

> 先生はタヾ一個の文芸家にあらず又一文学者にもあらず、一思想家にもあらず、先生は実に五億万極東二大民族に対して其行路を指示する処の一大預言者であつたのである[15]。

このように、昭和10年代の日本における魯迅は「東洋の作家」[16]として位置づけられることが多く、しかも過度に美化されている点は否めない事実であろう。また、この時期の魯迅イメージには政治的色彩が濃厚という点も特徴的である。このように、当時の日本では、ほぼ国民作家と見なされていた魯迅をモデルにして創作された作品が、日支における文化交流の象徴になったのみならず、「東洋一家」「日支平和」を宣伝する良い手段であったと思われる。一方、太宰は「惜別」の中で、のちに有名になった大文豪としての魯迅から目を背け、医学徒の頃の魯迅を取り上げたことから、当時の日本で流行っていた過度に美化された魯迅イメージから距離を置く姿勢がうかがえよう。

次に、太宰と魯迅との接点を見てみる。小田嶽夫の「『惜別』準備の頃」(『太宰治全集第7巻月報7』筑摩書房、1956年4月20日）に以下のような言説が認められる。

> 昭和十六年に私が「魯迅伝」を出したときのことだが、友人その他への寄贈をすませた二三日後亀井君を訪ねたら、「さっき太宰君が来たが、もう『魯迅伝』を全部読んだそうだ」と亀井君が語ったところから見て、太宰君はもうその頃魯迅についてはいくばくかの関心を持っていたものと想像される。

ここでの「亀井君」は、おそらく亀井勝一郎のことを指すと思われる。彼は1935年9月に魯迅関係の文章「魯迅断想」を雑誌に発表している。そうす

ると、亀井と親交が深まった1939年から、太宰はすでに魯迅関係のことに触れはじめた可能性があるだろうと考えられる。また、太宰が「芸術ぎらひ」(『映画評論』1-4、日本映画出版株式会社、1944年4月）という随想の中に魯迅を直接取り上げる記述も見られる。

> 魯迅の随筆に、「以前、私は情熱を傾けて支那の社会を攻撃した文章を書いた事がありましたけれども、それも、実は、やつぱりつまらないものでした。支那の社会は、私がそんなに躍起となつて攻撃してゐる事を、ちつとも知りやしなかつたのです。ばかばかしい。」といふやうな文章があつて、私はそれを読んでひとりで声を出して笑つてしまつた事があるけれども、私が映画に就いて語る場合も、少しそれと似たやうな結果になるのではあるまいかと思はれる[17]。

「惜別」一作は、1945年の始まりに執筆され、2月末に脱稿された[18]。「惜別」の「あとがき」に、太宰は次のように綴っている。「この「惜別」は、内閣情報局と文学報国会との依嘱で書きすすめた小説には違ひないけれども、しかし、両者からの話が無くても、私は、いつかは書いてみたいと思つて、その材料を集め、その構想を久しく案じてゐた小説である[19]」。つまり、太宰の魯迅に対する関心や思考は「惜別」の執筆以前からすでにあったもので、おそらく太宰も当時の魯迅研究ブームから多少の影響を受けただろうと推測される。さらに、日本人である藤野先生と清国留学生である魯迅との感動的な友好交際を描く「藤野先生」が日中両国の「独立親和」の主題に合致しているため、太宰は「藤野先生」を選んだのではなかろうか。

二、魯迅作「藤野先生」との比較及び太宰の意図

「清貧譚」や「竹青」と比べると、原典との比較という角度から「惜別」の分析を試みた論考は比較的に少ない。まず、これまでの比較研究にすでに指摘されてきた両作の違いを整理する。大塚繁樹は太宰自身が補足した諸点を整理した上で、「惜別」が一老医師の手記という形を取っているのは太宰が物語を「劇的にし然も客観化するため」の手段であると指摘している[20]。また、クリスチャンらしい言動を取る矢島を新たに登場させるのは「太宰のキリスト教への関心乃至思想を示している」こと、「私」と周さんとの交際のきっかけである松島見物が「太宰による巧みな状況設定」であること、「私」は自分

の田舎訛りを気にすることや周さんのキザな言葉づかいを嫌うことは「太宰の心境の投影である」ことと論じている。さらに、「惜別」では、周さんは「日本を神の国と見」ているのは「太宰の不当なフィクションであり、日本を美化聖化し過ぎている」こと、「私」と周さんと藤野先生との交わりが「戦時中に於ける太宰の理想を示している」こと、周さんが「惜別」に述べた日露戦争観は魯迅作「藤野先生」にはなく、「太宰の祖国びいき」であることも議論される。加えて、「惜別」では藤野先生の意見として現れた東洋一家論は、魯迅作「藤野先生」になく、太宰本人の「理想の現われである」こと、「ノート事件に対する津田氏の政略的な言動」は「小説に変化と面白味とを与えるためにした」こと、「惜別」結末部分での津田や矢島の改心は「太宰が東洋本来の道に基づいて広く暖い眼で執筆したためか、又は内閣情報局への気兼ねのため生じた所の歪曲」であることといった一連の見解もある。その他、魯迅作「藤野先生」には見られない「周さんをめぐる田中卓と津田憲治の三角関係が設定されている」ことに関する指摘も見られる[21]。しかし、既存の「惜別」研究を見てみると、まだ指摘されていない両作品の違いが何箇所か存在するため、「惜別」と原典である魯迅作「藤野先生」との比較研究はまだ十分とは言えないだろう。そこで、ここでは、先行論を踏まえつつ、これまであまり言及されてこなかった両作品の違いに注目し、太宰作「惜別」と原典との違いを再検討していく。

分析に入る前に、大東亜共栄圏の実態を知っておく必要があるだろう。その有様について、尾崎秀樹は次のように評している。

> 列強資本主義からのアジアの解放は、日本も含めて全アジア民衆の民族的な課題だった。その中で、日本は条件付の近代化に成功し、社会的諸矛盾を外に移して、アジアの解放を口にしながら軍事的経済的侵略を続けて肥えふとってきた。アジア諸地域の民衆にとって日本の登場は旧い奴隷支配者に代って新しい奴隷支配者が現われたということであったかもしれない。しかもその新しい支配者が、奴隷の解放を口にするやっかい至極な人間だということになれば、それはそれ以前よりさらに困った問題だったに違いない[22]。

このように、戦後、尾崎は、大東亜共栄圏の構想はただ当時戦争に苦しんでいた日本の侵略のための詭弁に過ぎなかったと述べている。そして、大東

亜会議に採択された五宣言も、他国をより効果的に支配するために設けられた口実であるとする。

一方、神谷忠孝は『惜別』（東郷克美・渡部芳紀編『作品論　太宰治』双文社、1976年９月30日）で、次のように綴っている。

> ここで注目したいのは新聞記者の描き方である。「不精鬚をはやした顔色のわるい中年の男」で「蒼黒い頬に薄笑いを浮かべて」「きめつけるような口調」で話すというように、故意に印象わるく書かれている。単純に考えれば、太宰治が抱いている新聞記者のイメージにすぎないかもしれないが、老医師があまりいい印象をもたないということには、太宰治の大東亜会議への消極的な批判がこめられていると考えることはできる。また、新聞記者のしつこい質問にいやいや答える老医師は、太宰治が魯迅には強い関心を抱きながら、上からの依嘱で書かなければならないという苦渋の姿勢がこめられていると思える。

このように、新聞記者を故意に印象悪く書いている点に、太宰の大東亜会議への批判が見られると神谷は指摘している。そのことについては確かにその通りであろう。しかし、「上からの依嘱で書かなければならない」という点に関しては疑問に思わざるを得ない。尾崎は「大東亜共同宣言と二つの作品――「女の一生」と「惜別」――」の中に、「もっともこれらの依嘱作家のうち実際に書き上げたのは、小説では太宰治、戯曲では森本薫のふたりに過ぎなかったらしい[23]」と指摘している。何十人の執筆希望者から選出され、さらに空襲下で書かれた「惜別」から、太宰が意欲的に創作していることがわかる。ゆえに、「惜別」は必ずしも「上からの依嘱で書かなければならな」かった作品ではなく、むしろ太宰が困難な現実にありながらも完成させたい苦心の一作であったと言うべきではないかと考えられる。

「惜別」の中には、魯迅の文章をそのまま引用しているところが何箇所かあり、細部まで魯迅の心情を忠実に写しているところも少なくない[24]。しかし、両作を比較して読んでみると、やはり異なる部分、つまり太宰による再創作の部分が見られる。ここでは先行研究を踏まえつつ、これまであまり指摘されてこなかった〈再創作〉を検討することを通じて、作家太宰の意図を考察していきたい。

「惜別」を魯迅作「藤野先生」と照らし合わせながら読んでみると、次のような太宰による〈再創作〉の部分が確認できる。

(1)周さんの人物造形

勉強について、魯迅は「藤野先生」では、「惜しいことに僕は当時あまりにも不勉強だつた。時にはひどく気儘でもあつた」（199頁）と自分の勉強ぶりを述べているのに対し、太宰は「惜別」の中では、周さんは勉強熱心で、松島で田中に「あさつてからは学校へ出て、僕と一緒に講義のノオトをとりませう」（191頁）と言い、勉強することの重要性について言及する場面すらある。さらに、周さんの容貌や人柄など多くの面に関する描写が見られる。

(2)藤野先生の周さんに対する愛情の内実

魯迅は「藤野先生」では、その愛情を教師が生徒に対する思いやり、日本人教師が清国留学生に対する特別な配慮であると解釈しているのに対し、太宰は「惜別」の中でそれを単純な教育愛ではなく、「東洋全部が一つの家である」、「東洋本来の道義」（230-231頁）へと繋げながら説明している。

(3)周さんの医学から文学への転向

魯迅本人によると、転向の動機は幻燈事件である。それに対し、太宰は「幻燈事件」は「彼の転機ではなく、むしろ彼がそれに依つて、彼の体内のいつのまにやら変化してゐる血液に気附く小さいきつかけに過ぎなかつた」（277頁）と述べている。

(4)下宿先の変更の件

魯迅の「藤野先生」では、下宿先を変更することを自分に提案したのは「ある先生」だが、「惜別」の中では、「津田さん」に変更されている。

その中で、(3)「周さんの医学から文学への転向」については、太宰自身がすでに作品の中でその理由について十分に説明しているので、ここでは贅言しない。（276-279頁）また、(4)「下宿先の変更」については、「ある先生」が「津田」に変更し、それは津田を自然に登場させる装置であると考えられる。そこで、本稿では(1)と(2)に重点を置いて検討していく。

(1)周さんの人物造形

まずは、周さんがノートの重要性を「私」に説く場面を見てみる。

> 私があまりに唯々諾々と従つたら、周さんは敏感に察したらしく、声を挙げて笑ひ、「しかし、あさつてからは学校へ出て、僕と一緒に講義のノオトをとりませう。僕のノオトは、たいへん下手ですが、ノオトは僕たち学生

の、」と言つて、少しとぎれて、「Preiszettel のやうなものです。」とまた私の苦手の独逸語を使ひ、「何円何十銭といふ札です。これが無いと、人は僕たちを信用しません。学生の宿命です。面白くなくても、ノオトをとらなければいけません。しかし、藤野先生の講義は、面白いですよ。（191-192頁）

ここで、あえて魯迅本人の随筆の内容に反し、太宰は「惜別」の中で勉強熱心な一清国留学生として周さんを描いている。それだけでなく、この短い引用文から、周さんの他人への配慮や謙虚な態度も読み取れる。

「存じて居ります。」
「さうだらう。」とその記者はいかにも得意さうに、「あなたとは同級生だつたわけだ。さうして、その人が、のちに、中国の大文豪、魯迅となつて出現したのです。」と言つて、自身の少し興奮したみたいな口調にてれて顔をいくぶん赤くした。
「さういふ事も存じて居りますが、でも、あの周さんが、のちにあんな有名なお方にならなくても、ただ私たちと一緒に仙台で学び遊んでゐた頃の周さんだけでも、私は尊敬して居ります。」
「へえ。」と記者は眼を丸くして驚いたやうなふうをして、「若い頃から、そんなに偉かつたのかねえ。やはり、天才的とでもいつたやうな。」
「いいえ、そんな工合ではなくて、ありふれた言ひ方ですが、それこそ素直な、本当に、いい人でございました。」（170-171頁）

ここで、新聞記者と老医師の周さんへの評価が対照的であると言えよう。大東亜会議を代表する新聞記者が「中国の大文豪」としての魯迅に興味津々であるのに対し、老医師は「のちにあんな有名なお方にならなくても尊敬して居ります」と言う。つまり、老医師は文学的才能や名声など外部的要素を排除し、ただ一人の人間として周さんのことを肯定している。また、「素直な、本当に、いい人」（171頁）、「あかぬけがしてゐて」（180頁）、「正しい人」（192頁）、「異国の秀才」（214頁）のような周さんを肯定する表現が作品に散見される。

では、太宰はなぜそこまで周さんのことを評価し、〈良き〉魯迅像を作ろうとしているのか。ここで注目したいのは周さんの出身である。彼は清国留学生であるため、母国の支那を代表する存在であるということは言うまでもないだろう。さらに、老医師である「私」が周さんに向かって次のような言葉を発している。「あなたのやうな人が、十人ゐたら、支那は名実ともに世界の

一等国になります」(251-252頁)。これは日本人である「私」が、周さんという一個人を通して支那を想像し、そして見つめている証になるだろう。

「「惜別」の意図」には、太宰はこう書いている。「中国の人をいやしめず、また、決して軽薄におだてる事もなく、所謂潔白の独立親和の態度で、若い周樹人を正しくいつくしんで書くつもりであります。現代の中国の若い知識人に読ませて、日本にわれらの理解者ありの感懐を抱かしめ、百発の弾丸以上に日支全面和平に効力あらしめんとの意図を存してゐます」。ゆえに、なぜ太宰が「惜別」の中で、意図的に周さんを評価しようとしているのかと言えば、確かに彼自身の文豪魯迅に対する尊敬の念が一つの理由として考えられるが、より重要なのは太宰が周さんの母国である支那を「卑しめず」、さらに偏見を捨て、客観的に受け止めようとしていたからではないかと思われる。

しかしながら、ここで少し角度を変えて考えると、事実に反し、さらに「私」に「あなたのやうな人が、十人ゐたら、支那は名実ともに世界の一等国になります」というような発言をさせ、ひたすら神的な〈良き〉魯迅像を作り上げようとする書き方自体がすでに、太宰本人が「「惜別」の意図」で綴ってある「中国の人を」「決して軽薄におだてる事」なく周樹人を「正しく」描写するという発言と矛盾しているのではなかろうかと思わざるを得ない。そこには、当時の魯迅を神格化する文壇における現象や政府が宣伝する虚偽の「独立親和」に対する太宰の批判やアイロニーが込められているのではないか。

(2)藤野先生の周さんに対する愛情の内実

随筆「藤野先生」では、先生が清国留学生として来日した青年魯迅に傾けた配慮や愛情が核となる部分が、最も感動的なところであろう。しかし、「惜別」では、その愛情は単なる教育愛だけにとどまらず、「東洋全部が一つの家である」、「東洋本来の道義」へと繋がっていく。太宰の意図を明らかにするために、藤野先生が「東洋全部が一つの家である」という言葉を発するまでの経緯を追いながら分析していく。

> 周さんは、私を、周さんの弟さんに似てゐると言つてゐたし、また、私のはうでは、周さんと逢つて話をしてゐる時だけは、自分のれいの言葉の訛りに就いての苦慮から解放されるといふ秘密のよろこびがあつて、そんな事が二人の親しい友交を成立させたとも考へられるが、しかし、そんなにいちいち理由らしいものを取上げて言ふまでも無く、ただ、俗に呼称する

「ウマが合つた」とかいふ小さい奇蹟は、国籍を異にしてゐる人の間にもたまたま起り得る現象なのかも知れない。けれども、この日本三景の一の松島海岸で不思議に結ばれた孤独者同士の何の駈引も打算も無い謂はば頗る鷹揚な交友にも、時々へんな邪魔がはひつた。純粋に二人きりの、のんきな交友など、この世に存在をゆるされないものかも知れない。必ず第三者の牽制やら猜疑やら嘲笑やらが介入するもののやうである。(214-215頁)

国籍を越え、自然に成立した「私」と周さんとの交友には、「何の駈引も打算も無い」とされる。「惜別」は大東亜会議の「独立親和」原則を広く宣伝するために書かれた小説であるため、ここで、日本人である「私」と支那人である周さんとの交際は、日本と支那との関係を連想させられる。しかし、その鷹揚な交友には、変な邪魔者が入った。「私」が津田憲治という生徒に呼び止められ、放課後彼と一緒に食事をする場面である。

鍋がかはつて、さらにお酒が持ち運ばれた。
「よく食ひ、よく飲むねえ。」と彼は私が豆腐をふうふう吹いて食べながら、また片手ではしきりに独酌で飲むさまを、いまいましさうな眼つきで見て、「君たちは、松島でも、随分飲んださうぢゃないか。こまかい事を聞くやうだがね、その勘定は誰が拂つた。だいじな事だ。」語調を改めてさう言つた。私は箸を置いて答へた。
「半分づつにしました。僕が全部拂ふつもりだつたのですが、周さんが、どうしてもさうさせませんでした。」
「いけない。君は、それだからいけない。一事は万事だ。君は、もう周さんと附き合ふのは、やめたはうがいい。国家の方針を、あやまる。周さんが何と言つたつて、君が全部支拂ふべきところだ。外国人とつき合ふ時には、自分も一個の外交官になつたつもりでゐなければいけない。第一には、日本の人はみんな親切だといふ印象を彼等に与へなければいけない。僕の叔父貴など、そのへんの苦心は、たいへんなものだ。何せ、いま戦争中なのだからね。中立諸国の者たちには、実に複雑微妙な外交的術策を用ゐなければいけない。殊に、清国留学生は難物だ。これは清国から派遣された学生でありながら、清国政府の打倒をもくろんでゐる。これをただ矢鱈にあまやかしても、日本の現政府の外交方針に、もとるやうな結果になりはせぬか。ただの親切だけでは駄目だ。一面親切、一面指導といふ優先者の態度を以て臨むのが、いまの外交官として妙訣ではないかと僕は睨んでゐる。ここだよ、君。相手に弱味を見せちゃいけない。一緒に遊んだ時には、必ず勘定はこちらで全部引受ける。つねに一歩先んじなければいかん。僕だ

つて、それはずゐぶん苦労してゐるのだぜ。こなひだのクラス会の時に、君は出なかつたやうだが、これからは出なければいかんね、そのクラス会の時にも、藤野先生が、幹事の僕に向つて、留学生との交際には気をつけるやうに、とおつしゃつた。」（224–226頁）

ここで注目したいのは津田の身分設定である。彼は「いまの日本の外交界では」、「若手で一流の働き手」の津田清蔵の甥で、外国通を自任している。そのため、津田の言う話は実は国の方針の縮図で、彼を大東亜会議の代弁者と理解していいだろう。外国人と付き合う時には、必ず「日本の人はみんな親切だといふ印象を彼等に与へなければいけない」のが外交官の苦心であると、津田は言っている。そうすると、大東亜会議が普及しようとする五原則の中の「独立親和」に当たる「親和」は、表面的には道義的東洋精神の精華と見えるが、実は偽善的で、一種の外交的術策に過ぎないことが明らかになる。

一方、「一面親切、一面指導といふ優先者の態度を以て臨むのが、いまの外交官として妙訣ではないか」という津田の発言から、主導的位置に立って他国を指導しようとする当時の日本政府の意図が明白になる。こうなると、「独立親和」の中の「独立」も、「大東亜共同宣言」に書かれている「大東亜各国は相互に自主独立を尊重」することとは完全に無関係なものになってしまっていたことがわかる。つまり、大東亜会議の「独立親和」原則は真の「独立親和」ではなく、ただの当時の政府の方便に過ぎなかったのである。

「惜別」で、津田は「背の高い、鼻の大きな油顔のキザつたらしい生徒」として描かれ、そして彼は「周さんと私との交友の、最初の邪魔者」である。国家の方針を伝達する外交官と血縁関係を持つ津田を大東亜会議の一つの化身であると理解することもできる。ここで、彼を故意に印象悪く描写していることから、太宰の大東亜会議やその空々しい「独立親和」原則への嫌悪感と抵抗がうかがえるだろう。また、細部を見れば、小説には津田の義歯に関する描写が見られ、「津田氏の上顎が全部ぶさいくな義歯なのを看破した」「私」は、「思はず、くすと笑つてしまつた」（221頁）。一般的に、日常生活の中で、上顎が全部義歯であるという若者は珍しいだろうと思われるが、津田はそのような人で、しかも彼の義歯はぶさいくであった。

では、なぜ太宰はそのような一句を文中に付け加えたのか。ここで、「津田の義歯」は「大東亜会議の虚偽な発言」のモチーフとして持ち出されており、

それを見抜いた「私」が「思はず、くすと笑つてしまつた」のである。前の分析を踏まえて考えると、ここでは、おそらく語り手は自分がすでに大東亜会議の虚偽を見抜いたことをきわめて婉曲的に表明し、さらにその偽りを嘲笑しているのではないかと考えられる。

最後に、津田は「藤野先生が、幹事の僕に向つて、留学生との交際には気をつけるやうに、とおつしゃつた」と「私」に言い、故意に先生の真意を歪曲し、嘘をついた。ここで、津田、もしくは大東亜会議の〈偽り〉が一層浮き彫りになったと言えよう。津田の話を聞き、藤野先生に裏切られたような気がした「私」は、確認のために先生のところに行く。藤野先生は支那を肯定した上で、「東洋本来の道義」を「私」に言い聞かせた。

> 「私は東洋全部が一つの家だと思つてゐる。各人各様にひらいてよい。支那の革命思想に就いては、私も深くは知らないが、あの三民主義といふのも、民族の自決、いや、民族の自発、とでもいふやうなところに根柢を置いてゐるのではないかと思ふ。民族の自決といふと他人行儀でよそよそしい感じもするが、自発は家の興隆のために最もよろこぶべき現象です。各民族の歴史の開花、と私は考へたい。何も私たちのこまかいおせつかいなど要らぬ事です。（中略）支那にだつて偉い人がたくさんゐますよ。私たちの考へてゐる事くらゐ、支那の先覚者たちも、ちゃんと考へてゐるでせう。（中略）東洋本来の道義、とでも言ふべき底流は、いつでも、どこかで生きてゐるはずです。さうしてその根柢の道において、私たち東洋人全部がつながつてゐるのです。共通の運命を背負つてゐると言つていいのでせう。さつき話した家族みたいに、どんなに各人各様に咲いたつもりでも、やつぱり一つの大きい花になるのだから、それを信じて周君とも大いに活溌に交際する事ですね。何もむづかしく考へる事はない。」先生は笑ひながら立ち上り、「一口で言へるやないか？　支那の人を、ばかにせぬ事。それだけや。」（230-231頁）

このように、「民族の自発」を重視し、他民族に要らぬ節介を焼かないというのは、藤野先生による真の「独立親和」の中の「独立」への解釈であろう。そして、清国留学生である周さんと共に医学を勉強し、「支那に新しい医学を誕生」させ、真摯な心を持って互いに助け合い、信じ合うことが真の「親和」への理解であったと考えられる。また、「互ひに励まし合つて勉強する事、之を和と謂ふ」（261頁）、「各人自発、之を和といふ」（263頁）といった藤野先生の発言は、大東亜会議の虚偽の原則に対抗するようにして、行間に鏤めら

れている。さらに、藤野先生は支那にも偉い人と良き伝統が存在しており、支那の人を、バカにしてはいけないと懇々と諭しており、一国家として支那を卑しめずに客観視する藤野先生の姿勢が強調されている。そこから見れば、真の「独立親和」を実現するには、相手を軽視しないことが不可欠であろう。ここで、太宰は藤野先生の口を借りて、彼自身が理解した真の「独立親和」の精神を作品を通して告白しているように思われる。

最後に、送別会のシーンに目を向けたい。いよいよ周さんと別れなければならなくなった時、送別会が「私」の下宿で開かれた。酒飲み大工とその十歳の娘、津田、矢島の両幹事、私、それから主賓の周さんが参加し、「今思えば噴き出したくなるくらゐの、声楽の大天才揃ひの珍妙きはまる合唱を行」った。

> まつさきにくるりとうしろを向いて泣いてしまつたのは、この津田氏であつた。口では何のかのと威勢のいい事を言つてゐながら、やつぱり、周さんと別れるのが、誰よりも淋しかつたのだらう。私は津田氏と附合つて、こんな佳い半面を見るにつれて、以前ほど都会人といふものを、おそろしくも、また、いやでもなくなつた。また、あの田舎ダンディと誤解せられてゐた矢島君も、その後、附合つてみると、ただ、ひどくまじめな人で、いつか周さんが仙台の人に就いて批評してゐたやうに、「東北の雄藩の責任を感じて、かたくなつてゐる」だけなのである。(286頁)

ここで最も重要なのは、やはり津田の変化であろう。最初から大東亜会議の、いわゆる虚偽の「独立親和」原則に従って周さんと付き合っていた彼は、送別会の時には泣き出し、誰よりも寂しそうな姿を見せた。それは津田がすでに大東亜会議の「独立親和」の欺瞞から目覚めたことを意味しているのではなかろうか。小説の結末部分から見られるのは、太宰の大東亜会議への否定、そして真の「独立親和」の到来への期待、さらに日支平和を待ち望む心であろうと考えられる。

おわりに

本稿では、太宰治文学の中で問題作と見なされ続けてきた「惜別」を中心に考察してきた。まず依嘱作家としての太宰が支那及び魯迅作「藤野先生」を選択した理由について分析し、さらに魯迅の「藤野先生」との比較を通じ

て、太宰の執筆の意図を検討した。結論をまとめると、一見、戦争や政治に協力する国策文学のように思われる「惜別」には、実は太宰の大東亜会議が打ち出した「独立親和」原則への否定や真の「独立親和」への賛美が存分に込められていると考えられる。その他、太宰の自分自身に対する皮肉もある程度うかがえるだろう。大東亜会議の代弁者として登場する「津田憲治」の名前は、読者に太宰の本名である「津島修治」を連想させ、そこには大東亜会議の虚偽を看破していながらも、その団体に身を投じることにした太宰による自身への嘲笑が読み取れるのではなかろうか。

しかし、太宰は大東亜会議の依嘱を受けたとしても、決して完全に彼らに同調しているとは言えない。彼は表面的には従順的態度を取っているが、実は自分の大東亜会議への否定を作品に巧妙に織り込み、しかも見事な成功を収め、「一字半句の訂正も無く通過した[25]」。そこから見れば、「惜別」は太宰が工夫を凝らした苦心の一作に違いないだろう。なお、ここでもう一点注意したいことがある。作品の冒頭部分には「これは日本の東北地方の某村に開業してゐる一老医師の手記である」という一句が見られる。日本にも中国にも東北地方が存在するため、あえて「日本の」という語を入れたことには、「惜別」は「竹青」と同様に、太宰が意識的に中国や中国人読者を考慮して創作された可能性も見出せるのではないか。これまでの分析を踏まえつつ改めてそのことを考えると、太宰は「惜別」を通じて「潔白の独立親和」という理念を中国人に伝えたいと思い、そしてまた、彼が願っていたのはまさに「日支全面平和」であったのだろうと考えられる。

注

「惜別」の本文引用は『太宰治全集８』（筑摩書房、1998年11月25日）により、魯迅作「藤野先生」の引用は鹿地亘、松枝茂夫、井上紅梅、増田渉、佐藤春夫訳『大魯迅全集（第２巻）』（改造社、1937年４月20日）による。なお、引用文中の下線、中略、注はすべて稿者による。旧字は適宜新字に改めた。

後注

[1] 1945年１月10日に発行された「文学報国」には、「小説戯曲委嘱作家決定／二月下旬には執筆完成」という見出しの記事が見られる。そこには、「『独立親和』の原則　太宰治」との内容が確認できる。

[2] 参考までに、「惜別」の梗概を以下に付す。

作品は日本の東北地方に開業している一老医師の手記の形で書かれている。1904年の初秋、「私」（田中卓）は「ある小さい城下町の中学校」を卒業し、大都会に位置する仙台医学専門学校に入学した。ある日、松島遊覧に出かけた「私」は自分と同じく言葉に訛りのある清国留学生の周さん（魯迅）と知り合い、親交を結ぶ。周さんは「私」と一緒に松島の旅館に泊まった夜、「自分の生立ちやら、希望やら、清国の現状やらを、呆れるくらゐの熱情を以て語」り、自国である支那への憂を「私」に隠さずに聞かせてくれた。解剖学の藤野先生は周さんと「私」と同様に言葉にひどい訛りがあったためか、私たち三人は「親密な同盟」を結んだ。しかし、ある日、「私」と周さんとの交友の「最初の邪魔者」である津田憲治という妙な学生が現れ、藤野先生が「留学生との交際には気をつける」必要があると「私」に伝えた。それを聞いて先生に裏切られたような気がした「私」は事実を確かめるために藤野先生の研究室に行った。そこで「交友とは、信じ合ふ事」だと固く信じる藤野先生は「東洋全部が一つの家だ」「東洋本来の道義」について色々「私」に説明してくれた。清国留学生である周さんの勉学を心配するため、藤野先生は講義の始まった時から彼の講義ノートに人知れず朱筆を入れていた。しかし、そのことが新幹事の矢島に知られ、試験問題の漏洩に関する嫌がらせ事件が起こった。

二学年の終わりの頃、周さんの医学から文学へ転換する考えの「総決算の口実の役目を勤めた」「幻燈事件」が起こる。授業の残り時間に映し出された日露戦争時のスライドの中で、日本軍に処刑されようとしている中国人と、その周りに立っている薄ぼんやりした表情をしていた中国人を見かけた周さんは、今の支那にとって何より重要な急務は「精神の革新」や「国民性の改革」であると「私」に語り、藤野先生の親切に恩義を感じながらも、文芸運動を起こすことを通じて民衆の精神改革をすることを決意し、帰国の途に就く。

[3] 尾崎秀樹「大東亜共同宣言と二つの作品――「女の一生」と「惜別」――」（『文学』29-8、1961年８月）20頁。

[4] 権錫永「〈時代的言説〉と〈非時代的言説〉――「惜別」――」（『国語国文研究』96、1994年９月）36頁。

[5] 情報局記者会著『大東亜共同宣言』（新紀元社、1944年２月１日）2-3頁。

[6] 同上、『大東亜共同宣言』「附録　大東亜会議日誌」19-21頁、「日本国中華民国間同盟条約」以外に、「日満議定書」（1932年９月15日午後４時政府発表）、「日タイ同盟条約」（1941年12月21日午後２時半情報局発表）、「日本国ビルマ国間同盟条約」（1943年８月１日午後９時情報局発表）、「日比同盟条約締結」（1943年10月14日午後７時30分情報局発表）などの内容も確認できる。

[7] 同上、『大東亜共同宣言』、「第十七章　文学者・新聞人も一丸」204頁。

[8]「「惜別」の意図」は、『太宰治全集第12巻』（筑摩書房、1956年９月20日）に初めて収録され、未発表のままであった。本稿の引用は『太宰治全集第10巻』（筑摩書房、1990年12月25日）によるものである。280-281頁。

[9] 安藤宏「資料解題」日本近代文学館編『太宰治　直筆原稿集　第３巻　「人間失格」、草稿その他』（雄松堂書店、2014年２月１日）による。

[10] 藤井省三「第七章　日本と魯迅」『魯迅――東アジアを生きる文学』（岩波書店、2011

年３月18日）を参照。152-157頁。

[11] 藤井省三「魯迅の読まれ方」『魯迅事典』（三省堂、2002年４月４日）286-292頁。

[12] 藤井省三「まえがき」『魯迅と日本文学　漱石・鷗外から清張・春樹まで』（東京大学出版会、2015年８月18日）による。ii 頁。

[13] 山田敬三は「戦後日本の魯迅論」という文章において、1949年10月の中華人民共和国の成立により、小田嶽夫の『魯迅の生涯』が出版された1949年９月から川上久寿の『魯迅研究』が出版された1962年まで12年以上の間に魯迅に関する専著は一冊もなく、日本における魯迅ブームの空白期を迎えると指摘している。山田敬三「戦後日本の魯迅論」『魯迅の世界』（大修館書店、1977年５月20日）を参照。275-276頁。

[14] 毛沢東「新民主主義論」日本国際問題研究所中国部会編『中国共産党史資料集』第10巻（勁草書房、1974年）199頁。

[15] 内山完造「魯迅先生追憶」特輯「魯迅悼惜」（『改造』、1936年11月）。

[16] 松本和也「昭和一〇年代における魯迅受容一面――佐藤春夫・中野重治・小田嶽夫」（『立教大学日本文学』第104号、2010年７月）117-118頁。

[17] 太宰治「芸術ぎらひ」、引用は前掲書『太宰治全集第10巻』（筑摩書房、1990年12月25日）による。283頁。

[18] 津島美知子は「後記」『津軽・惜別　太宰治全集第10巻（近代文庫120）』（創藝社、1954年10月31日）に、「惜別」の執筆や脱稿について次のように記している。「仙台から帰つて間もなく、昭和二十年を迎へ、「惜別」は、一月、二月と書きつづけられ二月末、二百三十七枚完成いたしました」。

[19]「あとがき」、本文引用293頁。

[20] 大塚繁樹「太宰治作「惜別」と中国古典」（『愛媛大学紀要第一部人文科学』10A（文学・語学篇）、1964年12月15日）60-62頁。

[21] 神谷忠孝『惜別』（東郷克美・渡部芳紀編『作品論　太宰治』双文社、1976年９月30日）260頁。

[22] 尾崎秀樹、前掲論文、22-23頁。

[23] 尾崎秀樹、前掲論文、27頁。なお、「文学報国」には、依嘱作家に関する情報が見られる。以下の通りである。

「「大東亜共同宣言五原則」作品化は、愈々急速にその実現をみることゝなり、既に第一部（小説）第二部（戯曲）共に委嘱作家も決定執筆を開始してゐる。二月下旬には何れも完成の予定であるが、その暁には演劇、映画、出版などの方法により関係団体を通じ第一線将兵及び広く国民大衆に普及宣伝せしむるほか、最も適当なる作品若干篇を選定して、これを翻訳せしめ対外文化宣伝誌その他機関に掲載し、これを大東亜共栄圏内にもおくる筈、なほ委嘱作家は左記の諸氏である。

第一部（小説）『共同宣言』全般に亘るもの　大江賢次、『共存共栄』の原則　高見順、『独立親和』の原則　太宰治、『文化昂揚』の原則　豊田三郎、『経済繁栄』の原則　北町一郎、『世界進運貢献の原則』（ママ）　大下宇陀児

第二部（戯曲）商業劇戯曲　関口次郎、同　中野実、同　八木隆一郎、新劇戯曲　久保田万太郎、同　森本薫」。

[24] 具体例を挙げると、太宰は「惜別」の中に、手記の内容の曖昧さについて老医師に次のように言わせる。「さて、私の胸底の画像と言つても、果して絶対に正確なものかどうか、それはどうも保証し難い。自分では事実そのままに語つてゐるつもりでも、凡愚の印象といふものは群盲象をさぐるの図に似て、どこかに非常な見落しがあるかも知れず、それに、もうこれは四十年も昔の事で、凡愚の印象さらにあいまいの度を加へて、ただいま恩師と旧友の肖像を正さんと意気込んで筆を執つても、内心はなはだ心細いところが無いでもない」。174頁。

一方、魯迅は『朝花夕拾』の「小引」には、「藤野先生」を含む十篇の作品について次のように言及している。「この十篇は憶ひ出づるままに書いたもので、実際とはことによると随分ちがつてゐるかも知れぬ。だが僕は今日こんなふうに記憶してゐるだけなのだ。文体も多分ひどく乱雑だらうと思ふが、それは書きさしては輟め／＼して、九個月以上もかかつたからである。環境も同一ではなかつた」。そのため、おそらく太宰はそれを参照したのだろうと考えられる。引用は太宰が実際に参照した鹿地亘、松枝茂夫、井上紅梅、増田渉、佐藤春夫訳『大魯迅全集（第2巻）』（改造社、1937年4月20日）による。97頁。

[25] 太宰は作品の「あとがき」に次のように述べている。「なほ、最後に、どうしても附け加へさせていただきたいのは、この仕事はあくまでも太宰といふ日本の一作家の責任に於いて、自由に書きしたためられたもので、情報局も報国会も、私の執筆を拘束するやうなややこしい注意など一言もおつしゃらなかつたといふ一事である」。294頁。